



アシュトン振付『真夏の夜の夢』でのエルナンデス Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

## イサク・エルナンデス

### オランダ国立バレエの若きスターに、デボラ・ワイスがインタビューしました。

DW: デボラ・ワイス(以下DW): メキシコのご出身ですね。大家族だったそうですが、皆さんダンスをなさるのですか？

IH: イサク・エルナンデス(以下IH): 信じられない話かもしれないけど、僕は元々11人きょうだいだったんです。でも女の子がひとり生まれてすぐに、6年前には男の子もひとり亡くなりました。なので残っているのは男5人女4人の9人。父がバレエ・ダンサーだったので全員バレエを習ったんです。父はニューヨークのハークネス・バレエで14年間踊っていたんですよ。その後メキシコに戻り、現役を引退して家庭を持ちましたが、子供を10人も抱えていたら、お金も足りず、いろんな可能性を与えてやることはできないですよ。だから両親は、僕たちにバレエを教えることにしたんです。父は裏庭にバーを作りましたが、普段はそれが物干竿。でこぼこの床に板を乗せると、そこがスタジオ！こんな風にして、僕は家族に囲まれてバレエを始めました。

DW: お父さんに習った後のプロへの歩みは？

IH: 12歳のときにユース・アメリカ・グランプリに出て、スカラシップを獲得しました。じつはその前年にもパリ・オペラ座バレエ学校とロイヤル・バレエ学校から誘われていたのですが、母が「11歳

で家を出て二度と戻ってきそうにないなんて、正気の沙汰じゃない」と反対したんです。母は僕にもっと近くにしてほしかったんでしょうね。このときはアメリカのロック・スクールが、親戚がひとり一緒にきてもいいからと入学を勧めてくれ、学校のすぐそばのアパートで暮らしました。とても充実していました。その後アメリカン・バレエ・シアターIIIに入り、メイン・カンパニーからも打診はあったけど、結局契約に至らなかった。ちょうどその頃ヘルギ・トマソンがクラスを見に来ることがあり、一度で僕をサンフランシスコに誘ってくれたんです。

DW: オランダ国立バレエに移籍した理由は？

IH: サンフランシスコは美しい街で、設備等も素晴らしかった。ダンサーの中にも兄弟のように親しい友達がたくさんできたと、他に目をやる必要が全然ない快適な環境で、バレエを中心とした生活を送っていたんです。しっかり踊るけれどゴルフも存分に楽しむような充実したライフスタイルでしたが、その中で僕の価値観も変化していきました。プリンシパルの数が多く全幕バレエの主演はそれぞれ一回ずつで、群舞のパートは踊らないのであまり忙しくもない。もっと自分ので力を試されて、向上していることを実感したいと思うようになったんです。じつは当時のガール・フレンドが交換プログラムでオランダ国立バレエに一年間在籍していて、彼女に勧められて見てみたところ、すぐに夢中になってしまいました。オランダに移る直前に、ABTのケヴィン・マッケンジーが「向こうに、すごくいい先生がいる」と言って、ギョーム・グラファンを紹介してくれたのもよかった。僕が移籍後最初に取ったのが彼のクラスでしたが、言わんとしていることが隅々までよく分かる、素晴らしい指導でした。

DW: ユルギタ・ドロニナとは特別なパートナーシップを築いていますが、その秘訣は？

IH: 僕が移籍した時ちょうど彼女のパートナーが退団したところで、『パキータ』で組んだのがきっかけです。とても踊りやすかったし、ほんの何時間か一緒にいただけで彼女の虜になってしまいました！二人ともギョームを敬愛していましたね。僕にとって、これまで技術的にも芸術的にもいちばん影響を受けたのがギョームだし、ユルギタと僕がパートナーシップを育ててこれたのも彼のおかげです。彼女とはお互いよく理解しあっています。ご存知のように『マノン』も一緒に踊りましたが、16カウントのキスを12回もしたんだから、もうお互い隠すことは何もない。共演者として本当にいい関係です。

DW: 16カウントのキスとは？

IH: 本来は13カウントですが、3カウント分長いんです(訳注:「寝室のパ・ド・ドゥ」での長いキスを指すと思われます)。誰でも初演の舞台では遠慮しがちですが、5度6度と共演を重ねるうちに感情表現も大胆になるもの…ですよ。(訳: 長野由紀)